ウルトラマンゼロ外伝　　～ブルーファイトウォーズ～

フルフル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウルトラマンゼロ外伝　　～ブルーファイトウォーズ～

【Ｎコード】
Ｎ１０６１Ｚ

【作者名】
フルフル

【あらすじ】
宇宙を飛行中のゼロは消えかけのウルトラサインを見つけた。
「地球を守護した赤き戦士」
「我の次元は赤き戦士は至れない」
「蒼き身体を持つ戦士よ」
「助けて欲しい」
意味深な内容のウルトラサインを見つけたゼロは蒼き戦士を探す旅を始める。

そして蒼き戦士の秘密が明らかとなる。

「プロローグ」（前書き）

よろしくお願いします。

「プロローグ」

～プロローグ～

そこは広大な宇宙空間。
果てのない宇宙には果てのない悪意を持つものが多々居た。
そしてなぜか狙われるのは「地球」という惑星ばかり。
悪意を持つ侵略者から度々地球を守り抜いた戦士がいた。
その戦士の名は「ウルトラマン」と呼ばれた。
紅き体に銀のラインを秘めた屈強な戦士だ。
自らが傷つき、苦痛に倒れても守り抜いてきた地球。
その地球は今は平穏を保っている。

そう今回悪意あるものに狙われたのは珍しく地球ではない。
惑星らきすた。
別名・幸運の星である。

～～～～～～～～～～～～～～

「そろそろ戻るか・・・」

宇宙をパトロールしていたウルトラセブン。
の息子のウルトラマンゼロはパトロールを終え、母星に帰還しようとしていた。

「ん・・・・何だあれは？」

ゼロは帰る途中に宇宙空間で点滅する光を見つけた。

「これは・・・緊急用ウルトラサイン！？」

そう、ゼロが発見したのはウルトラマン専用メモ「ウルトラサイン」だ。

「消えかけてるな」

そのウルトラサインは光を失いつつあった。

かろうじて読めるが消える寸前だった。

ゼロは急いでその内容を確認した。

「地球を守護した赤き戦士たちよ」

「我の次元は赤き戦士は至れない」

「蒼き身体を持つ戦士よ」

「助けて欲しい」

ウルトラサインの内容はそんなものだった。

「どういうことだ・・・・・・？」

その内容をゼロは掴めずにいた。

「とりあえず青いウルトラマンを集めろってことか・・・」

把握はしていないが勘で行動するのがゼロだ。

「俺は・・・赤とか混じってるけどいいのか？」

〈お前は大丈夫だ〉

どこからか不思議な声が聴こえてきた。

「誰だ！？」

ゼロは周りを確認し、警戒態勢をとった。

〈案ずるな、我はそのサインをだした者だ〉

〈蒼き戦士の基準は我が決めている、お前は大丈夫だ〉

〈蒼き戦士をとりあえず連れてきて欲しい、ダメな奴はここで弾く〉

少し勝手な言い分だった。

「お前は誰だ？」

ゼロは声の主が誰か確認した。

〈我はらきすた星という星の王だ〉

「なぜ蒼き戦士だけなんだ？紅い奴じゃダメなのか？」

〈今日の運勢で赤は縁起が悪い〉

「帰るぞ」

〜冗談だ、侵略者がプロテクトを張っていて紅き戦士は侵入不可なのだ〜

ゼロは首を振りながら言った

「なるほどな・・・いつまでに集めればいいんだ？」

〜今から４８０時間で我の星は滅びる〜

〜だからせめて３６０時間以内に蒼き戦士を集めて来て欲しい〜

「大体分かった、じゃあできるだけ集めてくる」

〜ありがとう蒼き戦士よ〜

そこで声は途切れ、聞こえなくなった。

「あおいウルトラマンか・・・コスモスくらいしか知らねえな」

「オヤジに聞いてみるか」

ゼロの言うオヤジとはウルトラセブンのことだ。

ウルトラセブンは紅き戦士。

ゼロに呼ばれることはないだろう。

「やっぱ一度戻るか・・・」

ゼロはＭ７８星雲・ウルトラマンの故郷に戻った。

これが蒼き戦士たちの闘いブルーファイトの始まりだった。

「プロローグ」（後書き）

少し適当ですが楽しんでいただけたら。

ステージ1　「蒼き戦士達の捜索」（前書き）

連載2回目でーす。

適当感はありますが頑張りますのでお願いします。

ステージ1　「蒼き戦士達の捜索」

謎の声に助けを毀れたゼロは現在、M78星雲にいた。

青いウルトラマンを探すためにベテラン戦士である自分の父「ウルトラセブン」に情報を貰うためだ。

「青いウルトラマンか・・・コスモス・・・あとダイナも青くなれたな・・・」

ゼロはセブンの下に向かいつつ、自分が知っている青いウルトラマンを思い出していた。

ゼロの話す「コスモス」・「ダイナ」も地球を守った戦士の一人だ。

コスモスのボディカラーは青ベースに銀のライン。

ダイナは基本タイプである「フラッシュタイプ」ならば銀・赤の戦士で青い戦士ではないが。

タイプチェンジをすることで青・銀の青き戦士「ミラクルタイプ」になることができる。

「ダイナはOKなのか・・・？まあ連れていけば分かるか・・・」

そんなことを考えつつ、ゼロは宇宙警備隊本部についていた。

「お、ゼロじゃないか！」

ゼロは後ろから聞こえた声に、振り向いた。

「おお、エース・・・・・さん？」

ゼロに声をかけたのは「ウルトラマンエース」

セブンと同期の英雄であり、現役の勇者だ。

「さん付はよせ、お前は既に立派なウルトラ兄弟だ」

そう、ゼロはウルトラマンベリアルを倒した功績を認められ、ウルトラ兄弟の仲間入りを果たしていた。

「ああ、分かった。それはそうとオヤジがどこにいるか知らないか？」

「セブンか？確か今さっき部下を連れてパトロールに出ていったな・・・」

セブンは今でも現役の戦士。

パトロールもしっかりこなしている。

「ええ？マジか・・・じゃあアンタに聞きたいんだけど」

「何だ？」

「体の青いウルトラマンを出来るだけ集めたいんだ、居所を知らないか？」

「少しなら分かるが・・・一体どうしてだ？」

ゼロは自分が蒼き戦士を探す理由と経緯をエースに話した。

「なるほどな・・・そういう訳か・・・」

「ああ、だから出来るだけ多い人数集めたいんだ」

「気持ちはわかるが、多忙な戦士も、行方不明の戦士もいる。思うようにはいかないかもしれん」

「行方不明？」

「ああ、任務に行ったきり帰ってこない戦士の事だ」

「ソイツの名前はなんて言うんだ？」

ゼロはなぜかその「行方不明の戦士」に興味をもった。

「その戦士の名前は〝ウルトラマンアグル〟ガイアと共に戦った青き戦士だ」

ウルトラマンアグル。

地球の海のエネルギーを司る、蒼き戦士の一人だ。

根源的破滅招来体「ゾク」とのガイアと協力した最後の戦いの後、姿を消している。

事実、ティガ・ダイナ・ガイアが別世界に招かれたときも姿を現す

ことは無かった。

「アグルか・・・なんか強そうだな！」

「ああ、元々は人間と敵対するウルトラマンだったが、ある怪獣の死を切欠にガイアと共闘するようになったそうだ」

アグルは人間を嫌っていた。

地球を汚すのは人間だと、違う意味で地球を守ろうとしていた。

だが、ガイアとの会話・決闘、そしてある怪獣の死を堺に人間を守る戦士になった。

「ガイアと知り合いなら、ガイアに聞けば分かるんじゃないのか？」

「ガイアも死力を尽くして探したが見つからなかったそうだ」

アグルは消息不明の戦士。

警備隊では〝消えた蒼き水流〟と呼ぶ者もいるほどの伝説になりつつある戦士でもある。

「そうか・・・・・・じゃあまずはソイツで決まりだな」

「聞いてなかったのか？ガイアが探しても見つからなかったんだぞ」

「でも、キングじいさんなら何か知ってるかもしれない」

ゼロの言うキングじいさんとは「ウルトラマンキング」のことだ。

M78星雲最強にして最大の権力を持つ永遠の英雄だ。
自ら戦闘に加わることは殆どないが、若き才能を見る目は人一倍だ。
かくゆう、ゼロもキングに鍛えられた戦士の一人なのだ。
「キングに聞く気か？」
「ちょっと無理があるか・・・」
キングはちょっとやそっとではひと目に出ることはない。
いつも誰も知らないどこかにいることが多い。
「なら、宇宙管理局に行ってこい」
「何でだ？」
「そこにアグルが残したウルトラサインのコピーがある」
「マジか！」
「ああ、誰も意味が理解出来なかったがそこに記録がある」
「ああ、じゃあ行ってみるわ」
「あと一人心当たりの戦士はいるが、呼んでおくか？」
「ああ、頼む」

ゼロは本部から徒歩４分のほぼ隣りにある宇宙管理局に向かった。

「なんだ・・・これ？」

ウルトラサインの内容はこうだった。

「時間がない」

「ボガアルが目覚める」

「時間がない」

「命に代えても、ツルギの鎧を」

「マジで意味わかんねえな・・・」

ゼロは１ｍｍも意味を理解できず、困り果てた。

「ぼがあるってなんだよ・・・ん・・・ボガアル・・・」

ゼロは前にセブンに無理やり読まされた「恐るべき怪獣ファイル」を思い出した。

バードン・ゼットン・イフ・ゾク・バルタン星人・・・・・・

星の数ほどいる怪獣の中でもさらに危険な怪獣を収めたファイルだ。

ゼロは当時そんなものに興味はなかったが、しぶしぶ読んだのだ。

Aランク怪獣・Bランク怪獣などと分けてあり、さらに上のSランク怪獣の欄。

「ボガール」

あらゆる惑星を食い散らかす、悪魔のような怪獣の総称。

派生系の怪獣にボガール・モンス等もいるが、まとめてボガールと呼ばれている。

事実、ウルトラマンヒカリの故郷・惑星アーヴはボガールによって滅ぼされた。

数は少ないものの、寿命が長く危険怪獣でもトップクラスの怪獣だ。

「このボガアルってのは・・・もしかしてボガールのことか？」

「だとしたら・・・ツルギの鎧ってのはヒカリのアレか・・・」

ウルトラマンヒカリは故郷をボガールに食われた後。

復讐に燃える復讐鬼と化した。

その際に身に付けていた鎧が「アーヴギア」

それを身に付けたヒカリは「ハンターナイト・ツルギ」と呼ばれていた。

「アーヴギアにボガール・・・おだやかな話じゃねえな」

ボガールはメビウスとヒカリの共闘によりやっと消滅した凶悪怪獣。

たとえゼロでも苦戦は免れないだろう。

「こりゃ、俺一人じゃ危なそうだな・・・アイツら呼んでみるか・・・」

〜あ、もしもし・・・オレだよ、オレ・・・いや詐欺じゃなくて・・・〜

〜グレン？悪いけどすぐ来てくんねえか？・・・・・ああじゃあミラーとジャンボも〜

〜じゃあよろしく〜

ゼロは本部の無線を勝手に使い誰かに連絡を取った。

「まあ４人そろえば勝てない奴はいないな・・・」

果たしてゼロは誰に連絡をとったのか・・・・・・

ステージ1　「蒼き戦士達の捜索」（後書き）

はい。

青いウルトラマンを題材にしたこの小説。

なんとかやっていけそうです。

うろ覚えの名前なので怪獣の名前とか間違うかもしれませんが。

そこは是非レビューいただければ。

続きまーす。

ステージ2　「久しい再開」（前書き）

2話目の投稿になります。

アグル捜索を開始したゼロ。

だがアグルの素性の背後には恐るべき計画が・・・

始まります。

ステージ2　「久しい再開」

「よおよおよお、久しぶりじゃねえかゼロ」

「本当ですね、お元気でしたか？」

「こちらも忙しいのだが、お前には恩もある」

今の話し声はゼロのものではなく。

ゼロがリーダーを務める部隊「ウルティメイトフォースゼロ」のメンバーだ。

初めに喋ったのが「グレンファイヤー」

炎を操るチームのムードメイカーだ。

2番目に敬語で話しているのが「ミラーナイト」

鏡を操る心優しき騎士だ。

最後に喋っていたのは「ジャンボット」

ロボットではあるが、心を持つ頼りになる仲間だ。

「おう、みんな悪いな。ちょっと危なそうな任務なんだよ、手伝ってくれないか？」

「別に構わねえよ」

「是非協力しましょう」

「仕方ないな」

「おう、よろしく！」

ゼロが本部無線を無断借用して連絡をとったのは彼らだった。

やはり新人のゼロには頼れる仲間は少ない。

フォースのメンバーはゼロと交友の深い仲間であり。

今のゼロにとっては最高の戦力である。

「んで、オレらを呼ぶほど危ねえ任務ってなんだよ？」

グレンはゼロの実力を知っている。

ゼロが余程の事が無い限り、人に頼るような奴ではない事も知っている。

それほどにゼロの力は大きいのだ。

「ああ、ボガールって奴を倒す」

「ボガールですって？」

ゼロの言葉に過敏に反応したのはナイトだった。

「知っているんですか？」

ジャンボはミラーに聞いた。

「知っているも何も、私の星「鏡の星」の兄弟星である「硝子の星」を滅ぼしたのがそのボガールです」

ミラーナイトの故郷「鏡の星」

鏡の中に存在する二次元空間にある星だ。

その兄弟星である「硝子の星」もまた二次元空間にある星だ。

「そうか・・・悪かったな・・・」

ゼロは言葉に詰まりながらナイトに謝った。

「いえ、お気になさらずに」

少し気まずい空気が漂った。

「とにかくだよ、一体そのボガールってのはどこにいるんだ？」

「ああ、目星はついてる。惑星アーヴってところに手掛かりがあるみたいなんだ」

「惑星アーヴだな、じゃあスグ行こうぜ」

グレンはゼロに目的地を聞き、行動を起こそうとした。

「焦りはよくないかと・・・」

「同感だな」

ジャンボとナイトはグレンに反発した。

「なんでだよ！早く行ったほうが良いだろうが」

グレンは元々気が短いほうだ。

何事にも急いで取り掛かる。

「そのアーヴという星に手掛かりがあるかは定かではないようですし」

「ちゃんと用意をしてからのほうが確実だ」

ナイトとジャンボは比較的正論でグレンをさとした。

「ちっ・・・じゃあオレだけで先に行くからな！」

グレンはそのまま彼方に消えた。

「おい、グレンっ！」

ゼロは呼び止めようとしたが、もう遅かった。

「仕方がありませんね、私が追いかけます」

ナイトはグレンを追いかけていった。

「しょうがない・・・ジャンボ、俺たちも行こう」

ゼロとジャンボはナイトを追いかけた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「足りない・・・・・・」

そこでは声だけが響いていた。

「もっと強いエナジーコアを・・・」

ステージ2　「久しい再開」（後書き）

はい、急ぎで少し雑になってしまいました。

改善するかもですがお願いします。

ステージ3　「小惑星帯の攻防」（前書き）

どんな作品も2までが素晴らしくて3が駄作になるという・・・

都市伝説があると聞いたことがあります。

ですが、この3話目も素晴らしいものにできるように頑張ります。

よろしくどうぞお願いします・・

ステージ3　「小惑星帯の攻防」

ゼロはウルティメイトフォースゼロの仲間と再会を果たした。
だが仲間内での諍いにより、今はグレンファイヤーをミラーナイトが。
そのミラーナイトをゼロとジャンボットが追いかけている。
～～～～～～～～～～
「グレン、待ってください！」
「うるせえ！お前らは準備してからくるんだろっ！」
ナイトはすでにグレンの真後ろまで追い付いていた。
スピードでは僅かながらナイトの方が上のようだ。
「あなた一人では危険です、ゼロでさえ私たちを呼んだんですよ！」
「っ・・・・・・敵がいるかどうかなんてわかんねえだろ、オレは先に行って様子を見るだけだ！」
グレンは自分が勝手な事をしていると自覚していた。
だが自分のプライドが謝ることを許さない。
たとえ和を乱すことになっても、自分で自分を抑えきれないのだ。

有り余る情熱が空回りしていると言ってもいい。

〜ボガールだかなんだか知らねえが、ゼロの邪魔になるなら・・・ぶっ倒すだけだ・・・〜

グレンは心の中でそんな事を思っていた。

たとえ焦っていても、仲間のことは考えている。

グレンもまた色々な意味で強い戦士だ。

「グレン、止まってください！」

ナイトは未だにグレンに声をかけ続けていた。

「・・・・・・」

グレンは応対せずにそのまま進んでいった。

「しょうがないですね・・・・・・ミラーシールド、応用編！」

ナイトは身を守るために使う技「ミラーシールド」をグレンの目の前に出現させた。

「なっ・・・・・・ごふぇ！」

グレンはミラーシールドにぶち当たり、移動を止めた。

「テメェ！何しやがる！」

グレンは怒りを浮かべ、ナイトに向き直した。

「いきなり止めたのは謝りますが、落ち着いてください」

あくまで冷静に、ナイトはグレンを諌める。

「逸る気持ちもわかりますが、一度ゼロ達と合流しましょう」

「・・・・・・しょうがねえな・・・・・・」

グレンは不満げに頷いてミラーの提案を受け入れた。

しかし・・・

ドォン！

「「っ！」」

グレンとナイトはほぼ同時に動き、謎の攻撃をかわした。

「誰だっ！」

グレンは攻撃の来た方向を向き、声を上げた。

そこに居たのは・・・

「青いウルトラマン・・・・・・？」

ナイトが疑問符を浮かべて相手を見据えた。

グレンとナイトが見つめる先には、「青いウルトラマン」がいた。

「アーヴニ、近ヅクナ・・・・・・」

機械的な声で青いウルトラマンはそれだけを言った。

「けっ、上等だ。邪魔するなら・・・・・倒して通るだけだ！」

「素性のしれない敵を相手にするのは危険ですが・・・やむを得ませんね」

グレンとナイトは構えを取り、臨戦態勢に入った。

「アーヴニ・・・・・近ヅクナァァァァッ！」

青いウルトラマンは、獣のような咆哮を上げて構えを取る。

「初めての共闘だな・・・行くぜナイト！」

「承りました、行きますよグレン！」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「なあ・・・ジャンボ・・・ここどこだ？」

謎の蒼き戦士とフォースメンバーの闘いが始まった・・・

「知らんな、そもそも私はお前についてきたのだからな」

ゼロの後についていたジャンボは迷った責任をゼロに転化した。

「ナイト～！グレン～？」

ゼロは届かない声で叫んでいた・・・・・・

ステージ3　「小惑星帯の攻防」（後書き）

ふう・・・だんだんと自分でもハマってきたなと思います。

次は初めてのバトルシーン。

グレンとナイトの奮闘にご期待！

ステージ４　「グレンとナイトの共同戦線」（前書き）

４話目の投稿となります。

初のバトルシーン投稿なので・・・

しょぼいバトルにならないように気をつけようと思います。

始まります。

ステージ4　「グレンとナイトの共同戦線」

ミラーナイトはグレンファイヤーを引き止め、帰還を提案した。
グレンファイヤーはそれをしぶしぶ受け入れた。
しかし、思わぬ襲撃者の攻撃を受け、２人は闘いを始めた。
しかし・・・ゼロとジャンボットはグレンとナイトを見失い、迷っていた。
「グレン〜！ナイト〜？」
ゼロは未だに聞こえない声で叫んでいた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「ウオらあッ！」
グレンが青いウルトラマンに燃えるパンチを叩き込んだ。
ゼロが迷っているのと同時刻。
グレンとナイトは突然の襲撃者を相手に激戦を繰り広げていた。
「なんだ、大したことたあねえな」

「油断は禁物です」

「わかってるって！」

グレンは相手の反撃を許さないほどに、素早く近づきパンチを続けた。

「オラオラオラオラオラファッ！」

青いウルトラマンは何も喋らず、パンチを受けた衝撃で小惑星に墜落した。

しかし、青いウルトラマンはすぐさま起き上がった。

そして右拳を握り締め、手の甲を前に向けて、頭上に掲げた。

それを胸の前に持ってきて、開いた左掌を右手の拳の甲に重ね・・・

さらに、腕を素早くクロスさせ何かをつぶやいた。

「ナイトシュート・・・・・・・・」

次の瞬間、青いウルトラマンの腕から輝く光線が発射された。

「何！？」

パンチがうまく決まり、油断していたグレンは直撃コースにいた。

だが・・・

その光線はグレンの目の前で何かにぶつかり、相殺され打ち消された。

「だから油断はしないでくださいと言ったでしょう」

ミラーナイトが「ミラーシールド」を発動させたのだ。

グレンはギリギリで攻撃を逃れたのだった。

「悪ぃな」

グレンはナイトに礼を言うと、慢心を捨てしっかりと構えた。

「いえ、気を付けてください」

ナイトは相手の謎について考えていた。

身体の形状からして、ゼロと同じウルトラマンだと言うことは理解していたが。

相手の青いウルトラマンにはエネルギー源であるはずの「カラータイマー」が無かった。

それがミラーナイトを悩ませていた。

「グレン、コイツは多分ゼロと同じウルトラマンです」

「マジかよ！じゃあどうするんだ？」

「攻撃してきた以上は・・・倒すしかないでしょう」
「分かりやすくていいぜ！」
グレンは警戒を怠らずに青いウルトラマンに近づいていった。
「ウアアアア・・・・・・」
青いウルトラマンはわめくような声を上げ、膝をついた。
どうやら苦しんでいるようだ。
「何だ・・・？」
急に苦しみ出した敵を目の前にして、グレンは足を止めた。
「俺は・・・ダレモ傷つけタクナいんだ・・・・・・」
最初とは違い、機械的ではない声も混じって喋り始めた。
「俺のニクシミはもう消えテイる・・・この鎧はモウ必要ナイんだ・・・」
「タノム・・・この鎧を・・・・・・壊してクレ・・・」
それを言い終えると青いウルトラマンはまた咆哮を挙げた。
「ウオアァァァァァァァァッ！！」
「よく分からねえが・・・あの鎧がアイツの苦しんでる原因みてえ

だな」

この場にいる者は誰一人知らないことだが・・・

青いウルトラマンの着用している「鎧」とは「アーヴギア」である。

本来「ウルトラマンヒカリ」のみが着用することのできる鎧であり。

別称・憎しみの鎧とも呼ばれる。

「・・・・・・アーヴニ近ヅクナ、ボガールハコノオレの手デ殺ス・・・」

ボガール。

ナイトはこのキーワードを聞き逃さなかった。

「あの鎧を破壊しましょう」

「言われるまでもねえぜ」

グレンは前に手を翳し、伸縮自在の棒「ファイヤースティック」を出現させた。

「行くぜ・・・」

ファイヤースティックを構えたグレンは青いウルトラマンに特攻した。

ファイヤースティックが相手を捉える直前。

「ナイトビームブレード・・・・・・」

そう呟いた青いウルトラマンの左手から光の剣が出現し、ファイヤースティックを受け止めた。

「ナイト！」

グレンが叫んだ時、ナイトはすでに青いウルトラマンの背後にいた。

「シルバークロス！」

シルバークロスとはミラーナイトの必殺光線である。

両手をクロスさせて放ったそれは、敵を目掛けて真っ直ぐに飛んだ。

しかし青いウルトラマンは右手を後ろにかざし。

「ウルトラバリア・・・」

と呟くと、光の盾が出現し、シルバークロスを防いだ。

さらにファイヤースティックを抑えていた左手を少し捻り。

グレンの腕を上に上げさせガードを空けた。

「ヤベエ！」

グレンの前身はがら空きだった。

青いウルトラマンはグレンの胸をめがけて左手のブレードを突き立てた。

「ナイトムーバー！」

ミラーナイトがそう叫ぶとグレンファイヤーは少し離れた場所に移動していた。

ナイトムーバーとは他人を反射物を経由して移動させる技だ。

その技のおかげでグレンはブレードの直撃を受けずに済んだ。

しかし、少し胸をカスってしまいダメージは免れなかった。

「グレン！大丈夫ですか！？」

ナイトは少し遅れた自分の対応を悔やみつつ、グレンの安否を確認した。

「カスリ傷だ、大したこたあねえ！」

2人は同じことを考えていた。

〜コイツ・・・強い・・・〜

2人の陽動作戦も失敗した今、有効な作戦は無くなっていた。

「おいナイト、どうする！」

「グレン、私に命をあずけてくれますか？」

ナイトは何かを考えていた。
勝つための作戦を。
「ああ、オレの命・・・お前にあずけてやるぜ！」
グレンはナイトを信頼し、己の命をあずけた。
「じゃあ私の言うとおりにしてください」
ナイトは小声で作戦をグレンに伝えた。
だが相手も素人ではない。
そんな隙を見逃すはずがない。
青いウルトラマンは始めと同じ構えを取り、腕をクロスさせた。
「ナイトシュート・・・・・・」
例の輝く光線が2人に向けて放たれた。
「ナイトムーバー！」
2人は瞬間移動で光線をかわした。
だが、グレンだけは青いウルトラマンの後ろに周り、腕を絡ませ動きを封じた。

「行くぜ・・・グレンスパーク！」

グレンスパークとはグレン最強の技であり、自らを烈火で包み込み、突撃する技である。

だが今回は相手を抱え込んで、そのまま自爆するかのようだ。

グレンがまばゆい光に包まれ、大爆発を起こした。

「ナイトムーバー&ディフェンスミラーコア！」

ナイトは爆発した瞬間にグレンをナイトムーバーで逃がし。

ディフェンスミラーとは強力なガラスのバリアであり、

ディフェンスミラーを応用した球体ドームにウルトラマンをとじこめ、爆発を内部に留めた。

青いウルトラマンはコアの内部で大爆発に直撃したことになる。

ナイトは脱出したグレンに駆け寄った。

「グレン、大丈夫ですか？」

「へへ・・・・・・余裕だぜ」

強がってはいても、やはり体力の消耗は激しいようだ。

一方、青いウルトラマンは。

爆発の煙が晴れて、姿を見せた青いウルトラマンは鎧にヒビが入っていた。

「おいおいおい、ヒビだけかよ・・・」

グレンは驚いた様子で相手を見つめた。

だが、ヒビだけではなかった。

「ウオアアアアア・・・・・・」

青いウルトラマンは弱々しい咆哮を上げ、鎧は砕け散った。

「成功・・・・・ですね」

ミラーナイトがグレンに向けて言った。

「オレ達の初勝利だな」

グレンファイヤーもナイトに答えを返した。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

一方、ゼロとジャンボットと言うと・・・・・・

「ジャンボ、ナビがあるなら早く言えよ・・・」

「聞かれなかったから答えなかっただけだ」

ジャンボットに搭載されていたスペースナビでミラーナイト達の所在を掴んでいた。

「まあいいや、急ごうぜ」

「ああ」

ゼロとジャンボットは、やっと2人に追いつこうとしていた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

そのころ、M78星雲にて。

「何だって？ゼロが青い戦士を？」

この声はウルトラセブン。

初期から地球を守ってきた英雄であり、ゼロの父親だ。

「ああ、どうやらフォースメンバーを連れていったらしいが」

この声はウルトラマンエース。

ゼロの相談を受けたあと、帰還したセブンにその事を伝えていた。

「それで、ゼロはどこへ向かったんだ？」

「確か、惑星アーヴだったな」

「そうか」

セブンは口には出さないが、一抹の不安を抱えていた。

なんの確証もないただの胸騒ぎだ。

だがそれは的中することになる。

ステージ４　「グレンとナイトの共同戦線」（後書き）

ちょっと・・・というかかなり長めにになってしまいました。

勢いで書いていたらいつの間にか。

なんだかかわしてばかりのバトルになりましたが・・・

一撃必殺ばかりなので食らったら即終了かなと思ったので・・・

次にこうご期待

ステージ5　「光の影の闇」（前書き）

どうもです。

前回が長めのバトルシーンだったので・・・・

今回はさくさく進めたいなと思います。

〜予定ですが・・・〜

始めます。

ステージ5　「光の影の闇」

ミラーナイトとグレンファイヤーは襲撃者との激戦の末。
ダメージを受けつつも勝利を収めた。
2人は鎧の砕けた青いウルトラマンを救出し、小惑星にて回復を図っていた。
「なあ・・・・・コイツ大丈夫なのか？」
「わかりません、起きてから事情を聞きましょう」
「いや、起きたら又襲いかかってくるんじゃねえか？」
「いえ、狂気の原因であるハズのあの鎧を壊したのですから、それはないでしょう」
グレンとナイトは小惑星のクレーターの中心にいた。
2人の傍らには例の「青いウルトラマン」が横たわっている。
鎧の消えた青いウルトラマンからは先程までの狂気は感じられない。
目の光は消え。カラータイマーも輝いてはいない。
「そういやあ、ゼロとジャンボはどうした？」
「グレンを追いかけてすぐに、私の後についてきていました」

「でも居ねえじゃねえか」

「貴方が逃げて、急いで追いかけたから、付いて来れなかったんです」

「人のせいかよ！？」

「いえ、事実です」

2人は闘い終えて、ゆるやかな会話を楽しんでいた。

そこへ・・・・・・

「おーい！ミラーナイト！グレンファイヤー！」

聞き覚えのある声が響いた。

「やっと来たか！」

「ですね」

グレンとナイトは同じ方向を見据えて口を揃えた。

「「遅い｛です｝」」

「しょ、しょうがねえだろ・・・ジャンボが早くナビ使わねえから・・・」

ゼロはさりげなく迷った責任をジャンボに転化した。

「人のせいか」

心無しか、ジャンボットは少し怒っているように見える。

「いや、誰がどう見てもお前が悪いからな」

ゼロはあくまでジャンボの責任だと言い張った。

「どっちのせいで迷ったかなんてどーでもいんだよ。それよりも」

「ゼロ、あのウルトラマンに見覚えはありますか？」

グレンとナイトが同じ方向をむいて、青いウルトラマンを指さした。

「ウルトラマン？」

ゼロはここでの闘いを知らない。

ウルトラマンが倒れているなど、予想外でしかない。

「コイツは・・・ヒカリじゃねえか・・・」

ゼロは倒れているウルトラマンを確認し、それが「ウルトラマンヒカリ」であることを知った。

ゼロはウルトラ兄弟の仲間入りをする際に、メビウスに挨拶をしたことがある。

その時、メビウスの隣にいたのがヒカリだった。

〈強くなれ、しかし力を欲しすぎるな。強さとは大きな力のことではない〉

その時ヒカリは、ゼロに今の言葉を伝えたのだ。

ゼロはその言葉を今でも覚えていた。

「何で・・・ナイト、何があったんだ？」

困惑しているゼロに、ミラーナイトは今に至る経緯を話した。

「・・・・・・・・・・・・というわけです」

ナイトは全てをゼロに話し終えた。

「・・・そうか・・・お前らは大丈夫だったのか？」

ゼロはウルティメイトフォースのリーダー。

仲間の身を気にかけるのもその資質からだろうか。

「オレらは余裕だったぜ！」

グレンは嘘をついた。

「いえ、ギリギリの危ないところでした」

ナイトがそれを正した。

「そりゃそうだろ・・・・・・」

ゼロは昔、訓練にてヒカリと模擬戦をした事がある。

その時には一撃も当てることができなかった。

レオの訓練で体術では秀でているハズのゼロの拳が、カスリもしなかった。

〜力任せに殴っても当たらない。つねに相手を見続けることが大切だ〜

ヒカリはそんな言葉も贈っていた。

「この人は確実に俺よりも強い、お前ら2人がかりでもよく勝てたな・・・」

ゼロは素直に2人の実力に感心していた。

「いや、鎧のせいかどうか知らねえが、動きにキレは無かったぜ」

「ええ、いつも動作が遅くてロボットみたいでしたよ」

「アーヴギアはただの鎧だ、アーマードダークネスみたいに装着車を操るなんて・・・」

アーマードダークネスとはその昔エンペラ星人が利用していた魔外装である。

暗黒の気を封じ込めた、闇の鎧だ。
ヒカリはアーマードダークネスを止めるために、取り込まれたことがある。
「とにかく・・・ヒカリを復活させよう」
ゼロはミラーナイトの方を見ると、少しだけ頷いた。
「分かった」
ミラーナイトもそれに応じて頷いた。
ナイトは宇宙空間に無数の鏡を作り出した。
それを縦に等間隔に並べて、はるか遠くまで延ばした。
「ミラーソルキャプチャー」
ナイトがそう言うと、一番手前の鏡から光が溢れ出した。
ミラーソルキャプチャーとは鏡を経由して太陽エネルギーを増幅して遠くへ運ぶ技だ。
溢れだした光はヒカリのカラータイマーを照らした。
「ウア・・・・・・アア・・・・・・」
するとカラータイマーは光を吸収し、元の青色を取り戻した。

「ヒカリ！・・・・おい、ヒカリ！」
ゼロは声の限り大きくヒカリに呼びかけた。
するとヒカリは目に光を灯し、自我を蘇らせた。
「ここは・・・・・・お前は・・・ゼロか？・・・・」
ヒカリは意識を取り戻し、周りの状況を確かめた
「ああ、ゼロだ！ヒカリ、アンタ一体何があったんだ！？」
「そうだ・・・俺はボガールを殺して・・・メビウスにナイトブレスを託して・・・」
ヒカリは昔の出来事を走馬灯のように話し始めた。
「ザムシャーと闘い・・・エンペラ星人を倒し・・・」
ザムシャーとはヒカリと同等の実力を持つ「宇宙剣豪」
強い相手を求め続け、ヒカリと闘い敗北した。
最後はエンペラ星人の攻撃から地球人を守り、散った。
「アーマードダークネスを破壊して・・・ベリアルを倒して・・・」
実際ベリアルを倒したのはゼロだが、今は言う時ではない。
「そうだ！俺はあの後、惑星アーヴの同士の墓に勝利を伝えに行っ

たんだ・・・」

やっと最近の出来事を語りだしたヒカリだった。

「仲間の墓前で勝利を伝え・・・M78星雲に帰るところだった・・・」

ヒカリは信じがたい言葉を口にした。

「・・・俺は帰る途中で〝アグル〟の攻撃を受けて、負傷した」

孤高の戦士、蒼き水流とまで言われる勇者「アグル」がヒカリを襲った。

ヒカリは、そう言った。

「どういうことだ？何でアグルが・・・」

ゼロは疑問符を浮かべることしかできなかった。

元々、惑星アーヴに向かう理由は「アグルにつながる情報」を手に入れるためだ。

ヒカリの口から「アグル」という言葉が出た時点で困惑を隠しきれなかった。

「分からない、だが確かに俺はアグルの攻撃を受けた」

ヒカリは意識を確かな物にして、話し始めた・・・・・・・・・

～～～～～～～～～～～～

場所は移り、Ｍ７８星雲・・・

「どういうことですか！」

宇宙警備隊本部会議室にて、何者かの怒声が響いていた。

この声の主は「ウルトラマンガイア」

アグルの朋友であり、地球の大地の力を司る戦士である。

「落ち着いてください！まだ決まったわけじゃないですよ！」

今度は別の声が響いた。

この声の主は「ウルトラマンゼアス」

Ｍ７８星雲ではない、別の惑星出身の戦士だ。

現在は、ガイアの補佐として任務についている。

「これが落ち着いていられるか！」

ガイアはゼアスの静止も振り切り、会議室にいた「もう一人の戦士」に訴えた。

「だが、事実だ」

３人目の声。

彼の名は「ゾフィー」

宇宙警備隊隊長にして、ウルトラ兄弟のリーダー。

権力に関してはキング・ウルトラの父・ウルトラの母につぐＮｏ．４である。

そしてゾフィーは言葉を続ける。

「最近目撃されている〝量産型アーヴギア〟について・・・」

静かに、話す。

「それを利用し、惑星を破壊している犯人と思われる者の映像だ」

会議室の画面に「ある戦士」の映像が映し出された。

そこに映し出されたのは、蒼き戦士。

その昔「消えた蒼き水流」と呼ばれ親しまれていたた・・・

「・・・・・・これはアグルで間違い無いな・・・ガイア・・・」
映像に映し出されたのはアーヴギアを装着した「ウルトラマンアグル」だった。
顔こそ確認できないが、体の色、ラインがアグルそのものだった。
「違うっ！これは何かの間違いだ！」
「先輩！落ち着いてください！」
憤るガイアをゼアスが抑える。
「気持ちは分かる・・・だがこれを放置するわけにはいかない」
ゾフィーは震える声で言葉を続けた。
「見つけ次第、拘束。抵抗したらお前が葬れ、ガイア」
この事件はブルーファイトの序章に過ぎなかった・・・・・・

ステージ5　「光の影の闇」（後書き）

〜どうしよう・・・〜

〜すごく大きな事態に・・・〜

〜これ続けられるかな・・・・〜

おっと、皆さんどうもです（＾ω＾）

なんとも緊迫してまいりました。

アグルの陰謀、ガイアの信頼。

次からは色々複雑になりますので、お付き合いください。

ステージ６　「ヒカリＶＳアグル　１」（前書き）

こんにちは。

６話目となります。

お気に入りにしてくれた方のためにも頑張りたいと思います。

始まります。

ステージ6　「ヒカリVSアグル　1」

これはウルトラマンヒカリの過去回想である・・・・・・・

～～～～～～～～～～～～

「久しぶりだな・・・・・・みんな・・・」

ウルトラマンヒカリはベリアル事件の後。

故郷である「惑星アーヴ」にて、今は亡き同士達に勝利を伝えていた。

「俺たちは勝ったんだ・・・みんなの宇宙を守ることができた」

ヒカリは数ある墓標を前にして、独り言のように語った。

そして、少しの時が流れた。

「じゃあみんな、また来る・・・次は見どころのある新人も一緒に」

「見どころのある新人」とは言うまでもなくゼロの事だ。

ヒカリは自分の「身体の色」に誇りを持っている。

自身が蒼き戦士として生を受けた事に、誇りをもっていた。

だから「蒼き身体」を持つゼロに対して、興味を持ち、好感を持った。

助言や模擬戦の受け入れも、その精神からだろう。

「それじゃあ、また」

ヒカリが故郷を後にし、Ｍ７８星雲に戻る途中

惑星アーヴを出てすぐに、目の前から光線が飛来した。

「何！？・・・・・・・くっ！」

間一髪、光線をかわしたヒカリは移動を止め。

周囲を警戒しつつ「ナイトビームブレード」を発動させた。

だが・・・・・・。

「ぐあっ！」

背後からの光線、いや「光弾」だった。

「くっ・・・・・・一体、どこから・・・」

ヒカリは神経を研ぎ澄ませた。

また背後から光弾が飛来した。

「そこか！」

ヒカリはブレードで光弾を切り裂き、「目に見えた敵」に切りかか

った。

ギィンッ！

硬質物がぶつかる音が響く。

敵も右手からブレードを発動し、ヒカリのブレードを受けきった。

そしてヒカリは気づいた

「お前は！？」

ヒカリが相手の正体を把握した瞬間、敵は左手で光弾を発射した。

ヒカリは防御が間に合わず、惑星アーヴに墜落した。

衝撃で大地が少し削れた。

「くそっ・・・・・・どういうことだ・・・」

ヒカリは思いもしない敵の正体に戸惑いを隠せない。

「一緒に来てもらおうか・・・」

敵は惑星アーヴに降り立ち、それだけを告げた。

「一体なんのつもりだ・・・アグル・・・」

ヒカリに立ちふさがる敵は「アグル」だった。

だがヒカリは違和感を感じていた。
そう、今のアグルは「普通のアグル」なのだ。
アグルは地球でガイアにエネルギーを渡し、一時期変身不能になっていた。
だが苦戦するガイアを助けるために、海のエネルギーを与えられ、再変身した。
その姿こそが「アグルＶ２」なのだ。
Ｖは「ヴァージョン」を表し、「ヴァージョン２」という意味である。
その際、アグルの身体の色は「青・黒」から「青・黒・金」に変わった。
だが今目の前にいるアグルは「青・黒」の初期のアグルだった。
多少の不信感を抱きつつ、ヒカリは警戒した。
「悪いようにはしない。ついてきてくれるならな・・・」
アグルはヒカリの質問を無視し、要求だけを話した。
「言いたい事は・・・それだけだな」
ヒカリは言い終えると「ナイトビームブレード」を再発動し、構えた。

「是非も無しか・・・」

アグルも「アグルブレード」を発動し、構える。

「手加減はしない、お前を倒す」

たとえ同じ戦士でも、襲撃を受けた以上は全力で対処する。

己の甘さを完全に捨てきる事が、ヒカリにとっての相手への礼儀なのだろう。

「こちらとしては、大人しくついてこなければ殺してもいいと言われている」

アグルはそう言い放った。

「やってみろ」

ヒカリは言い終えると同時にアグルに切りかかる。

アグルはそれを迎え撃つかのようにブレードで受け止める。

ヒカリはアグルが受け止めたと同時に蹴りをいれた。

不意をつかれたアグルは、かわせずに後ろ吹っ飛ばされる。

ヒカリは右手を頭上に上げ、胸の前で左手とクロスさせ、構えた。

「ナイトシュート！」

ヒカリの必殺光線「ナイトシュート」がアグルを捉えた・・・・・・

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ステージ6　「ヒカリVSアグル　1」（後書き）

すいません。

私用で2部に分けます。

申し訳ありません。

次の話もすぐに更新します。

どうもです。

ステージ7　「ヒカリVSアグル　2」（前書き）

始まります。

ステージ7　「ヒカリVSアグル　2」

これはウルトラマンヒカリの過去回想の続きである・・・

～～～～～～～～～～～～

ヒカリは惑星アーヴからの帰還途中。

謎の敵の襲撃を受けた。

そしてその敵の正体は消えた英雄「ウルトラマンアグル」だった。

一方的なアグルの態度に、ヒカリは不信感を抱きつつ立ち向かう。

そして勝負の序盤・・・・・・

ヒカリは必殺光線である「ナイトシュート」をアグルにくらわせた。

ハズだった。

「なるほどな・・・・・・」

この言葉はヒカリのものだ。

ヒカリは何かに納得したように言った。

「お前は本物のアグルじゃない」

それは予想ではなく確信だった。

なぜなら、アグルは。

「これにはお前が一番詳しいだろう？」

今度はアグルが喋った。

アグルは「アーヴギア」を装着していた。

ヒカリが復讐鬼と化していた頃の鎧。

そしてアーマードダークネス戦には「勇者の鎧」として使われた。

ヒカリ専用とも言える「アーヴギア」をアグルが纏っていた。

「どういう事かは知らないが・・・」

ヒカリは静かに、重く、続ける。

「それはアーヴの同朋が与えてくれたモノだ」

「たとえ偽物のアーヴギアだったとしても・・・」

ヒカリの故郷、アーヴの仲間はボガールによりほぼ全てが亡くなっている。

ほんの数名は脱出できたらしいが、それもさだかではない。

ヒカリは「同朋」を何よりも大事に大切にしている。

その同朋が死んでなお自分のために「与えてくれた鎧」
それがアーヴギア。
それを何者かもわからない者が利用している。
ヒカリにとってはこれ以上ない侮辱だろう。
「貴様はアーヴの誇りを汚した、命にかけてお前を倒す」
「やってみろ」
偽アグルは先程のヒカリと同じ挑発をした。
「偽物のアーヴギアでは俺には勝てない事を教えてやる」
ヒカリはそう言うと右手を胸に押し当て、呟いた。
「アーヴの同朋よ・・・今一度、俺に戦士の鎧を、勇者の誇りを・・・」
そう言うとヒカリは、アーヴの大地から漏れた光に包まれた。
光が消えた時、ヒカリは鎧を纏っていた。
正真正銘の本物の「アーヴギア」である。
「ありがとう・・・」
ヒカリはそれだけを言うと偽アグルに向き直った。

「今、その鎧を外せば、命までは取らない」

「バカか。死ぬのはお前だ」

偽アグルはそう言うと両手を前に突き出した。

「リキデイター！」

リキデイターとはアグルの必殺光弾である。

それは真っ直ぐヒカリに向かっていく。

「そういえば・・・」

ヒカリはリキデイターをかわしながら前に進んでいる。

「もう一つ・・・」

軽々とかわしながらしゃべる続ける・・・

「忘れていたな・・・」

ヒカリは「ナイトビームブレード」を発動した・・・

「お前を倒す理由が増えた」

さらに前に進む。

「クソっ！なぜ当たらない！？」

偽アグルは力任せにリキデイターを打ち続ける。
「お前を倒すもう一つの理由・・・・・・」
ヒカリは偽アグルのリキデイターをブレードで切り裂いて進む。
そして偽アグルの目の前まで来ていた。
「かかったな？」
偽アグルは右手を頭部に押し当て、エネルギーを蓄える。
「喰らえ・・・・・・フォトンクラッシャー！」
そして超至近距離のヒカリに向けて、必殺技である「フォトンクラッシャー」を浴びせた。
それはヒカリに直撃し、ヒカリは爆発と煙に消えた。
「ふっ・・・大人しくついてくれれば良かったモノを・・・」
偽アグルは勝利を確信し、ヒカリの死を確認せずに飛び去ろうとした。
だが。
「もう一つは・・・アグルの誇りを汚したことだ！」
ヒカリは煙の中から飛び出し、ブレードで偽アグルを切り裂いた。

「ぐあっ！」

偽アグルは背後から切り裂かれ、致命傷を負いその場に倒れた。

「バ、バカな！アレを食らって生きているハズがない！」

偽アグルはフォトンクラッシャーの直撃を見ていた。

それは無傷で済む技ではない。

ただし、それは「本物のフォトンクラッシャー」であればの話。

「本物のアグルならまだしも・・・貴様のような偽物の技で俺は死なない」

「だがっ！無傷で済む訳がない！」

「これが同朋の意思の込められた〝本物のアーヴギア〟の力だ」

ヒカリは強く言い放った。

「貴様のアーヴギアには誰の意思も感じない、だから簡単に切り裂かれる」

ヒカリの言うとおり、偽アグルのアーヴギアは一撃で破壊されていた。

鎧としての働きを全く果たしてはいない。

「く、くそがあああっ！」

偽アグルは「アグル」を捨てた。

「それが貴様の正体か・・・」

今ヒカリの目の前にいるのは「アルギュロス」

地球でもアグルに化けて、破壊活動をしていた。

高い知能を持つ「金属生命体」である。

「ああ！そうだよ！アグル？オレ様はアルギュロスだ！」

「もうアグルの振りはいいのか」

「もうどうでもいいんだよ！お前を殺せば全て丸く収まる！」

アルギュロスは右手をマシンガンのような形に変え、ヒカリを狙う。

「死ねえええええ！」

アルギュロスは右手のマシンガンから弾を撃ち放った。

「今のお前にアーヴギアは必要ない」

ヒカリはアーヴギアを解除した。

「アグルとアーヴの誇り・・・貴様を倒して取り戻す」

ヒカリは右拳を握り締め、頭上に掲げた。
そして胸の前で開いた左掌を右拳に重ねた。
次に両腕をクロスさせ、十字に構える。
「ナイトシュート！！」
ヒカリのナイトシュートはアルギュロスの弾を消し去る。
そしてアルギュロスを目掛けて進む。
「クソクソクソッ！」
アルギュロスは諦めずに弾を打ち続ける。
「紛い物は消えろ」
ナイトシュートはアルギュロスをとらえ、大爆発を起こした。
アルギュロスは一片の破片も残さず完全に消え去った。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

戦い終えたヒカリはもう一度同朋の墓標の前に赴いた。
「みんなアーヴの地を汚したことを許してくれ」

「この大地は俺が守る、もう二度と侵略者の手には落とさせない」
ヒカリはそれだけを言うと、最後に一言言い残した。
「ありがとう、みんな」
そしてヒカリは墓標を後にし、今度こそ帰還しようとした。
ヒカリが飛び去ろうとした瞬間。
・・・ズブ・・・
ブレードが何かを貫く、鈍い音が響く。
「なっ・・・ごはっ・・・・・・・」
貫かれたのは「ヒカリの腹部」だった。
紛れもない致命傷である。
ヒカリは背後からの攻撃に気づくことも出来なかった。
たとえ戦闘後で疲労していたとしても、ヒカリの背後を取れるものなど殆どいない。
ヒカリはダメージの大きさから、力尽きるように倒れた。
「お・・・まえ・・は・・・・」
ヒカリは倒れ様にしっかりと見た。

ブレードの先に見える相手を。

それは「本物のウルトラマンアグル」だった。

「済まない・・・・・・」

それだけを言うとアグルは飛び去った。

一瞬の出来事だった。

ヒカリは自分のダメージの大きさを理解している。

このままでは死ぬ。

脳裏をそんな考えが過ぎった。

ヒカリは目の光を失い、カラータイマーの光も消えた。

そして完全にその動きを止めた。

ここまでがヒカリの覚えている部分である。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

しかし・・・・・・

〔死なせるものか・・・〕

どこからかその声は響いた。

〔我が同朋を、この大地を守護してくれた勇者を〕

誰もいないアーヴの地に声は響き続ける。

〔今度は我らが守る時だ〕

声が止んだ瞬間、倒れているヒカリが光に包まれる。

そしてヒカリの身体は「アーヴギア」に包まれた。

〔もう誰にもヒカリを傷つけさせない〕

声がもう一度響く。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

時間はもとの時間に戻る。

それはゼロがヒカリを助けた時間に。

ステージ7　「ヒカリVSアグル　2」（後書き）

ヒカリの襲撃の謎やアグルの正体の伏線回収が上手く出来て良かったです。
いまいちバトルシーンの盛り上がりに欠けますが・・・
少しづつ上手くなりたいです。

ステージ8　「同朋の信念」（前書き）

少し時間が空きましたが更新です。

あまり滞らないように続けたいと思います。

ステージ8　「同朋の信念」

時間は現在に戻り。

場所は惑星アーヴ。

ゼロがヒカリを助けた時点だ。

「なるほど・・・な・・・」

ゼロはヒカリの話を聞き、少しだけ落ち着いた。

〜ヒカリは正々堂々と闘って、負けた訳じゃないんだな〜

そんな事を考えていた。

ゼロは模擬戦にてヒカリの実力を理解していた。

だからこそ、たとえ相手が消えた英雄でも「真剣勝負」で負けることは有り得ない。

背後からの一撃でやられたならば、ヒカリでも無理はない。

ヒカリの敗北、という不自然さにゼロは納得した。

「・・・意味がよくわからねえな」

グレンはヒカリの話を把握しきれていなかった。

そしてそのまま続けた。

「アルギュロスはアグルのフリしてただけなんだろ？」

「しかもヒカリはアグルのためにアルギュロスを倒したんだろ？」

「それで何でアグル本人がヒカリを殺そうとするんだよ」

グレンの言うことはもっともだった。

どんな理由があるにせよ、同郷の戦士を手にかける事は重罪だ。

アグルがどんな意図でヒカリを手にかけたかは定かではないが。

それは許されることではない。

「それはアグル本人に聞いてみるしかないと思いますよ」

ナイトがグレンに向けて行った。

「まあ・・・・・・だな」

「とにかく、一度Ｍ７８星雲に戻ろう」

ゼロが帰還を提案した。

ヒカリの傷は治りきっている訳ではない。

妥当な判断だろう。

〖待て〗

アーヴの大地から声が響く。

「みんな・・・・・・」

ヒカリが弱々しく呼びかける。

〖済まない、ヒカリ〗

〖もうヒカリが傷つけられる事の無いようにと〗

〖我々が勝手にアーヴギアを装着させた〗

〖だが、意識のない状態で装着したために〗

〖ボガールを追っていた頃の記憶がフラッシュバックされたのだ〗

〖そのせいで、アーヴを守る・敵を殺す〗

〖その2つを無意識に実行するようになってしまった〗

〖アーヴに近づく者を敵と認識したのはアルギュロスとの闘いの記憶〗

〖それがフラッシュバックされたのだろう〗

〖本当に済まない〗

それは今は亡き「アーヴの同朋達」の声だった。

ヒカリと共に育ち、ヒカリと共に笑い、泣いた。
その故郷アーヴを命懸けで守り抜いてくれたヒカリ。
同朋にとっても「ヒカリは大切な同朋」なのだ。
ヒカリだけが傷つくのは見過ごせなかったのだろう。
そして同朋の声はヒカリだけではなく・・・・・・
〜そして、来訪者よ、悪いことをした〜
それはグレンとナイトに向けられたものだった。
〜其方たちを傷つけようと考えていたわけではなかった〜
〜責任は我々にある〜
〜ヒカリを許して欲しい〜
いくつもの声が重なり、同朋の声は響く。
「ああ、別に気にしてねーよ」
「私も問題ありません」
グレンとナイトは責めることもなく許した。
〜ありがとう、来訪者よ〜

〜せめてもの償いに、アーヴの力を分け与えよう〜

〜少しでも有効に使って欲しい〜

アーヴの大地から漏れた光はグレンとナイトを包み込んだ。

「・・・何も変わってねえぞ」

「・・・そうですね」

2人の外見は何も変わってはいない。

〜与えた力は3度までしか使えない〜

〜ヒカリとは違い、アーヴの力を自由自在には与えられないのだ〜

〜危機に陥ることがあれば、アーヴの力を解き放て〜

同朋達の声は幾重にも聞こえる。

〜そして烏滸がましいが頼みがある〜

〜ヒカリを守って欲しい〜

〜ヒカリと共に戦って欲しい〜

〜〜〜〜〜〜〜〜それこそが我らの願い〜〜〜〜〜〜〜〜

重なる声は今までで一番大きく、響いた。

「ああ、任せろ！」

ゼロは声の限り叫んだ。

「守る、なんて俺にはまだ無理かもしれない」

「だが、命にかけて共に戦う事をアーヴに誓う！」

ゼロは何に向けて言うわけでもなく。

それは自分の心に刻みつけたのだ。

〜ありがとう、ウルトラマンゼロ〜

〜我らは見ている〜

〜其方らの勇姿を〜

〜頼んだぞ・・・〜

そこで声は途切れ、聞こえなくなった。

「みんな・・・ありがとう・・・」

ヒカリは力強く言った。

そしてフォースメンバーも一旦落ち着きを取り戻した。

「！」

だがジャンボットだけは臨戦態勢をとっていた。

「おい！上から何かくるぞ！」

スペースナビで近くの宇宙を監視していたジャンボットは感知していた。

ジャンボの言葉に、ヒカリを含めた全員が構えを取った。

そして宇宙から新たなる来訪者が現れた。

「おーい、大丈夫かー」

声が先に聞こえた。

そしてその姿は・・・・・・

「おっ、いたいた」

宇宙警備隊の特別任務担当の「ウルトラマンネオス」である。

「「「「「・・・・・・」」」」」

ヒカリを含めたフォースメンバーは何も答えなかった。

「いや、帰りが遅いからって、セブン隊長に見てきてくれって言われてさ」

ネオスの所属は特任担当。

いうなればセブンの後輩である。

「正直いつもセブン２１と行くから不安だったけど、そんなでもなかったかな」

グレンは無言でネオスに近づいた。

「ん？おお！あなたがゼロさんですか！？」

「いやー噂は伺ってます、初めまして！」

グレンは拳を握り締めた。

〜おい・・・グレン・・・・〜

ゼロが小声で呟いた。

「あれ、どうしま・・」

そこでネオスの声は途切れた。

グレンが渾身の鉄拳を顔面に加えたのだ。

「紛らわしいんだよ！！！」

敵の襲来かと思えば、後輩だったのだ。

グレンの反応も無理はない。

だが殴る事はないだろう。

「え、ちょ、何が？」

ネオスは混乱していた。

「ああ、もういいから、ホラ立て、行くぞ」

グレンはネオスに謝る事なく、帰還しようとした。

「え、あ、ハイ」

ネオスも混乱しつつ従った。

そしてフォースメンバーとネオスとヒカリは惑星アーヴを後にした。

～～～～～～～～～～～～～

「先輩」

「・・・何だ」

「気にすることないですよ、アグルさんがあんな事・・・」

「するわけがない・・・か？」

「はい、有り得ませんよ・・・」

「そんな事オレが一番よく知ってる」

「なら・・・」

「だが万が一、アグルが犯人なら、オレは容赦はしない」

「でも、親友なんでしょう!?」

「お前はまだ若いから、分からないかもな」

「・・・」

「親友だからこそ、だ」

M78星雲、本部会議室では2人の戦士が会話をしていた。

誰が会話をしていたかは、本人達以外には知る者はいない・・・・・・

ステージ8　「同朋の信念」（後書き）

・・・・・・

結構まとまってきたので、次からは新章突入です。

と言ってもタイトルコールは変わりませんが。

次回にご期待下さい。

ステージ9　「新たなる光」（前書き）

新しい青いウルトラマンを登場させます。

勿論普通のウルトラマンも出ますが・・・

始まります。

ステージ9　「新たなる光」

「ゼロ・・・・・・元気にしてるかな・・・・」

ある蒼き戦士の独り言である。

「ん？何か言ったか？」

ある赤き戦士の言葉である。

「いえ、何でもないですよ」

「そうか」

Ｍ７８星雲の本部待合所での会話である。

～～～～～～～～～～～～

ヒカリを助けたゼロ。

そしてアーヴの力を手に入れたグレンファイヤーとミラーナイト。

実質何もしなかったジャンボット。

彼らはアーヴを後にし、Ｍ７８星雲に帰還していた。

「やっと着いたな」

ゼロは自分の故郷を前にして、感慨もなく呟いた。

「俺は久しぶりに来たな」

ヒカリはずっとアーヴを守っていたのだ。

行方不明、と言われるほど長くはないが、かなり長い間戻っていない。

「じゃあ俺はメディカルセンターに行く」

ヒカリが言った。

「え？一人で大丈夫か、ヒカリ？」

ゼロはまだ傷の治りきっていないヒカリを心配した。

「ああ、お前たちのおかげでな」

「そっか、じゃあまた後で」

「ああ」

ヒカリはゼロと別れ、一人でメディカルセンターに向かった。

ちなみにメディカルセンターとは、文字通り病院である。

ただし、ヒカリのように一流の戦士は特別病棟にてウルトラの母直々に治療を受けられる。

「さて・・・・・・俺たちはどうするか？」

ゼロはフォースメンバーに聞いた。

チームと言っても、安全な場所で行動を共にする必要は特にない。

基本的に自由行動のチームでもある。

「オレはちょっと会いたい人がいるから行くぜ」

グレンはそう言うと、ささっと歩いていってしまった。

「私は特にやることはありませんので、ゼロに同行します」

ミラーナイトはゼロと行動を共にするようだ。

「私も待ち合わせしてる奴がいるから、失敬する」

ジャンボットも歩いて行ってしまった。

「んー、じゃあミラーナイト行こうぜ」

「ええ」

ゼロはナイトと共にある場所に向かった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「よう、オヤジ、今帰ったぜ」

「おお、やっと帰ったか！」

ゼロが向かったのは特別任務担当の訓練所。

そこでセブンと会う約束をしていたのだ。

「全く、なんの報告も連絡もよこさないからネオスを向かわせたんだぞ」

セブンは比較的過保護である。

まさかゼロが負けるとは思っていないが、心配はしていた。

ましてや72時間余りも連絡をしないゼロなのだ。

親でなくとも心配はするだろう。

「ネオス・・・ああアイツか」

ゼロは記憶を辿り、顔を思い出した。

「アイツは特任の中でもかなりの実力者だ、迎えにはちょうど良かった」

セブンが珍しく「戦士を褒めた」

セブンは隊の中でも滅多に褒めることなどない。

厳しさに関しては一番だろう。

「え！？アイツって強いのか？」

ゼロは少し失礼だが、当たり前の反応をとった。

軽すぎる態度で現れて、グレンのパンチもかわせなかった戦士。

強いとは思えないのはゼロだけではないだろう。

「強い。今まともに戦えばお前でも勝てないかもな」

セブンは冗談など言わない。

本気でゼロでは勝てないと思っているのだ。

「いくらオヤジでも笑えないぜ」

「それなら、模擬戦してみるか？」

わざと挑発するような言動をとるセブン。

「望むところだ！」

ゼロは簡単に挑発に乗ってしまった。

「ん、そういえば君は・・・ミラーナイト・・・だったかな？」

セブンがミラーナイトに注目した。

「はい、ゼロにはいつもお世話になってます」

急に家族同士の挨拶のようになった。
「礼儀正しいな、流石は騎士というところか」
「恐縮です」
「そうだ君も模擬戦をしてみないか？」
セブンはゼロの認めたフォースメンバーの実力に興味があった。
ミラーナイトも例外ではない。
「私が・・・ですか？」
ナイトは少しだけ動揺していた。
ウルトラ戦士との闘いなどナイトにとっては皆無だ。
唯一、ベリアルウィルスに侵されていたときにゼロと闘った位だ。
「ああ、ネオスと同等以上の力の持ち主がもう一人いるんだ」
「それってセブン２１か？」
意外にもゼロが答えた。
「そうだ、よく知ってたな」
「いや、ネオスがいつもセブン２１と仕事するとか言ってたから」

確かにネオスはアーヴに来た時に言っていた。
いつもはセブン２１と来る、と。
「セブン２１なら君とも互角以上の戦いが出来るだろう」
「・・・わかりました、騎士としてその勝負、お受けします」
ナイトは模擬戦を承諾した。
「よし！そうと決まれば善は急げだ。早速開始しよう」
セブンは無線を取り出し、こう告げた。
「ネオス、セブン２１、模擬戦だ。すぐに訓練所に来るように」
そして無線が切れた瞬間・・・・・・
バンッ！
訓練所のドアが勢い良く開いた。
「特任担当ネオスです！」
「特任担当セブン２１です！」
無線が切れて数秒しか経っていないにも拘らず。
２人の戦士は現れた。

「セブン隊長！私と２１で模擬戦でしょうか？」
ネオスはアーヴの時とは打って変わり、ナイトのように礼儀正しい。
「いやお前たちにはこの２人と勝負してもらう」
セブンがゼロとナイトを指さした。
「え、ゼロさん？」
ネオスはやっとゼロ達に気づき、驚いた。
「セブン隊長！勝てるわけないじゃないですか！」
「いや、案外勝てるかもしれないぞ」
「いや、オレと２１でも無理ですよ」
「何言ってる、お前だけでゼロと戦うんだ」
ネオスは動きを止めた。
「・・・これは模擬戦ですよね？」
「そうだ」
「・・・わかりました」
若干騒いでいたがネオスは覚悟を決めた。

「では私は誰と闘うんでしょうか？」
セブン２１はセブンに言った。
「お前にはこの人の相手をしてもらう」
ミラーナイトを指さしながらセブンは伝えた。
「・・・この方は？」
「ゼロの同士、ミラーナイトだ。ゼロと五角以上の実力の持ち主だ」
「わかりました」
セブンの言葉に、一瞬で油断を消したセブン２１。
「よろしくお願いします」
「いえ、こちらこそよろしくお願いします」
セブン２１とミラーナイトは握手を交わした。
「じゃあ、ゼロさんお願いします！」
「ああ、全力でやろうぜ」
ゼロとネオスも握手を交わした。
そしてセブンは場にいる全員に伝えた。

「1時間後にここで模擬戦を行う、各自体調を整えるように」

その言葉で全員が一旦落ち着いた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

場所は少し変わり・・・

M78星雲の第3支部の訓練所・・・

「やっと見つけたぜ・・・」

この声はグレンファイヤー。

会いたい人、に会うためにここまで来たのだ。

「おい！アンタ！」

グレンは少し離れた場所座っている相手に呼びかけた。

「・・・ずいぶんと、世間知らずな若造が来たものだな」

呼ばれた相手が静かに答えた。

「アンタなんだろ、ゼロを鍛えた師匠ってのは」

グレンは大声で続けた。

「オレにも修行をつけてくれ！頼む！」

グレンは何者かに修行をつけてもらいに来たようだ。

それも「ゼロの師匠」なるものに。

だが。

「フン・・・お前程度じゃあ組手にもならん」

相手は気にも留めない。

「ああ！？じゃあこっちから行くぜっ！」

相手の言葉に頭に来たグレンは、渾身のパンチを相手にくわえた。

「なっ！？」

しかしその拳は相手の拳に掴まれていた。

「軽い、拳も、覚悟も、軽すぎて話にならん！」

相手はグレンの拳を放し、同時に一発の鉄拳を入れた。

それはグレンが認識する前にグレンをとらえ、吹っ飛ばした。

「ごふっ！」

グレンは訓練所の壁に叩きつけられ、息を吐いた。

「・・・やっぱ強えな・・・・・・」

グレンは相手を見据えて呟いた。

「オレに修行してくれだと？お前じゃ修行してもなんの意味もない」

「どういう意味だ・・・」

「そのままの意味だ。どれだけ修行しようと、どれだけ闘おうと」

相手は続けて喋った。

「お前は強くはなれない」

その言葉にグレンはうつむいた。

「帰れ」

相手は無情にグレンを突き放した。

だが、それでは終わらなかった。

「帰らねえよ・・・」

グレンはゆっくりと立ち上がった。

「オレには力が、いや強さが必要なんだ」

静かで、それでいて重く喋り始める。

「オレはまだ全然弱い」

「人前じゃ強がってるが、チーム内じゃ最弱かも知れねえ」

「オレはオレの無茶で仲間が傷つくのは・・・もう見たくねえ」

「だから、オレに修行をつけてくれ！」

そしてグレンは相手の名前を叫んだ。

「頼む！ウルトラマンレオ！」

レオと呼ばれたその戦士はゆっくりと立ち上がった。

「・・・少しは骨があったみたいだな」

レオとはゼロがまだ半人前の未熟な戦士だった頃。

ゼロが求めてはならない力を求めかけた頃。

少し昔にゼロを鍛え、育てた、体術では右に出るものはいない戦士だ。

「いいだろう、ただし修行には条件がある」

レオはグレンに向けて言い放つ。

「必ず、得た力で仲間を守れ」

グレンはレオの目の前に立ち、見つめながら言った。

「当たり前だぜ」

～～～～～～～～～～～～

場所はさらに変わり・・・

M78星雲・セントラルパーク・・・

「待っていた」

ジャンボットは目の前の相手に話しかけた。

「久しぶりだな」

相手もそれに応えて話す。

「ああ、お前に頼みがあってな」

「なんでも言ってくれ」

「ウルティメイトフォースゼロに加わって欲しい」

「・・・それは出来ない」

「なぜだ」

「オレはお前たちを傷つけたからな」

「昔の話だ」

「だが事実だろう」

親しげな会話を続けるジャンボとその相手。

「もうお前を恨む奴などいない」

「だが・・・オレはお前を壊すために作られたようなものなんだぞ」

「違う、お前は私の仲間になるために生まれたんだ」

ジャンボは続けて相手の名前を言った。

「仲間になってくれ、ジャンナイン」

話していた相手は「ジャンナイン」だった。

ジャンナインとはジャンボットを模して作られたロボである。

最初は「ジャンキラー」としてジャンボットと闘っていたが。

戦闘をを切欠に闇の呪縛から逃れ、ジャンナインとして生まれ変わ

った。

その後ゼロと共闘するなど、今では紛れも無く正義の戦士だ。

「・・・わかった、だがゼロ達は納得するのか？」

「するに決まってる。そうでなくても、させてみせる」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ゼロはネオスと模擬戦。

ミラーナイトはセブン２１と模擬戦。

グレンファイヤーはレオと修行。

ジャンボットはジャンナインと再開。

フォースメンバーは新たな局面を迎えていた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「おい、ゼロが帰ったみたいだぞ」

冒頭で話していた赤き戦士の声だ。

「本当ですか？」

冒頭で話していた蒼い戦士の声だ。

「ああ、お前は初めてじゃないだろ」

「ええ、前に一緒に闘いました」

「ならいい」

「行きましょうか」

「ああ、行こう」

2人の戦士はゼロの下に向かおうとしていた・・・・・・

ステージ9　「新たなる光」（後書き）

・・・

セリフが多くて状況がわかりにくくなってしまいました。

もしかしたら編集するかもしれませんので。

読んでくれている方には申し訳ありません。

ステージ１０　「ゼロＶＳネオス」（前書き）

久々の更新ですが。

飽きていなければお楽しみください。

ステージ１０　「ゼロＶＳネオス」

場所は特別任務担当・訓練所。

セブンの勧めと挑発により。

ゼロとネオス・ミラーナイトとセブン２１の模擬戦が始まろうとしていた。

「まずは、ゼロとネオスだ」

セブンが２人に伝える。

「これはあくまでも訓練だ、相手に殺意を抱くな」

「だが、油断と手加減は必要ない、全力でやれ」

セブンは模擬戦における諸注意を言い終えた。

しかし、ゼロとネオスはそれに応えない。

なぜなら、既に２人は目の前の相手に集中しているからだ。

油断も、慢心も、容赦も。

今の２人には微塵もない。

お互いを見据え、構えを固める。

そして。

「始めっ！」

セブンが闘いの始まりを告げた。

それと同時に、ゼロは動き出した。

「ハッ！」

ゼロは体を一回転させ、ネオスに裏拳を叩き込んだ。

しかし、ネオスはそれをガードし、逆にその手を握り締め。

捻るようにして、ゼロを投げた。

投げられたゼロは空中で回転し、見事に着地した。

「なんだ・・・やるじゃねえか」

ゼロはネオスに向けて言った。

「これでもセブン隊長の部下ですので」

ネオスは自嘲気味に応えた。

「俺はそのセブンの息子だからな、負けるわけにはいかねえぜ」

「自分も、セブン隊長の名誉を守るために、負けられません」

2人は同じ人物の誇りと名誉のために闘っていた。
たとえ尊敬する人物が同じでも。
抱く思いはそれぞれ違う。
「行くぜ！」
会話を終えて、すぐにゼロは駆け出した。
そして勢いそのままに、飛び蹴りを浴びせかける。
ネオスはアウェーで飛び蹴りを受けつつ後退し、威力を半減させた。
ネオスはゼロの足をつかみ、上に持ち上げて倒れさせようとした。
だがゼロは空中で後方に回転し。ネオスの胸に蹴りを浴びせた。
ネオスは衝撃を受けきれずに後ろに倒れた。
その後も一進一退の攻防が続いた。
しかし、セブンは見ていた。
「ネオス！」
セブンがネオスに向けて怒号を飛ばした。
その声に。ゼロもネオスも動きを止めた。

「手加減は無しと言ったハズだ、ちゃんとやれ！」

ネオスはそれに対して。

「自分は本気でやってます、ゼロさんが本当に強いんです」

と言った。

セブンはそれを、一字一句漏らさずに聞いた。

そして、ネオスに対しこう言った。

「それはお前が俺の隊に入るときに、俺と模擬戦をした時の言葉だ」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

それは過去の話。

ネオスがセブンの特別任務担当に配属されたとき。

セブンはネオスの実力を見るために、模擬戦を行なった。

闘いはほぼ拮抗していて、引き分けかと思われた。

しかし、その時もセブンはネオスに対して言った。

「お前、本気じゃないだろ、しっかりやれ！」

それを言われたネオスは。

「自分は本気でやってます、セブン隊長が本当に強いんです」
と言った。
それを聞いた瞬間。
「お前は別の隊に行け」
セブンは模擬戦を中断し、訓練所の扉を開けた。
「・・・どういう意味ですか・・・・・・」
「お前は俺と本気で模擬戦をしない。これは俺に、いや、俺の隊全てに対する侮辱だ」
セブンは目利きだ。
若い戦士の実力を見るだけなら、キングにも負けないほどに。
その目により、ネオスが本気でない事に気づいた。
本気で相手と闘わない。
セブンにとってこれは「対等でない」という意味に捉えられたのだ。
自分が本気でなくても、セブンの相手はできる。
そうネオスは言っているようなものなのだ。
「お前は、自分に嘘をついているだろう」

セブンはうなだれているネオスに話し始める。

「立場や関係ばかり考え、若者らしい実力を隠している」

「お前は自分のしたい事と、自分のしている事が違うんだ」

「もう少し、簡単に考えろ」

セブンは、ネオスの目の前に行き、肩に手を置いた。

「お前の周りは、お前を受け入れてくれる」

言い終えたセブンは訓練所を出ていった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「そんなことが・・・」

ゼロはセブンの話を聞いて、少し驚いた。

「・・・・・・」

ネオスは以前のようにうなだれている。

「ネオス！！！」

セブンの声が訓練所に響きわたる。

その声にネオスはセブンに顔を向けた。
「お前はもう、何も我慢する必要はない」
セブンは静かな声でそう言った。
「お前の力を、見せてつけろ」
ネオスに向けて。
そして。
「ゼロさん・・・・・すいません」
ネオスはゼロにお辞儀をした。
「ここからは本気でやります」
それは覚悟を決めた戦士の声だった。
「上等だぜ、俺も今までは肩慣らしみたいなもんだ」
ゼロはそれに応えた。
セブンがもう一度言った。
「始めっ！」
ネオスは、ゼロを、倒した。

～～～～～～～～～～～～

場所は変わり、メディカルセンター。

そこにはヒカリと2人の戦士がいた。

「ヒカリさん、本当にアグルにやられたんですか？」

赤き戦士の一人が聞いた。

「ああ、間違いない」

ヒカリがそれに応える。

「でも、意識が朦朧とした状態で見たんでしょう？それならもしかしたら・・・」

もう一人の赤き戦士がヒカリに言った。

「よせ、この人はそんなヘマをする人じゃない」

始めの赤き戦士が質問を下げた。

「どうするつもりだ、ガイア」

ヒカリがガイアと呼ばれた戦士に向けて言った。

「勿論、被害を増やさないためにも・・・アグルを倒します」

ガイアはそう返した。

「そうか・・・・・・」

ヒカリは何かを感じていただろうが、口には出さずに黙った。

「有難うございました。帰るぞ、ゼアス」

ゼアスと呼ばれた戦士は頷いて、ガイアについていった。

残されたヒカリは言った。

「どこまで事態が大きくなるんだ・・・・・・」

それが蒼き戦士の運命だったとわかるのは、少し先の話である。

ステージ１０　「ゼロＶＳネオス」（後書き）

少し過去回想が多くなりました。

次回は決着です。

コス〇スをだす予定です。

ステージEX　「ベリアルの守ったもの」（前書き）

番外編の一つ目となります。

本編も進めずに番外編というのもなんですが。

本編への伏線になりますので。

よろしく願います。

ステージEX　「ベリアルの守ったもの」

これは、ベリアルがまだ「ウルトラマン」だった頃の話である・・・・・・

～～～～～～～～～～～～

宇宙警備隊・第3支部・書庫にて・・・

「面倒くせえなあ・・・・・・」

そこには一人の戦士がいた。

「書類整理なんてオレの性に合わねえっつーの」

その戦士は「ウルトラマンベリアル」

求めてはならない力を求め。

悪に堕ち、誇りを失い。

ゼロとの激闘の末、倒された悪のウルトラマン。

しかし、それは少し未来での結末。

これはその時よりも数十年前の話である。

無論、ゼロはまだいない。

「よし・・・これで最後だ」
ベリアルは自らの師に頼まれた書類整理を終えた。
そして書庫を出て、管制室に向かった。
「終わったぜ、ゾフィー」
そこにいたのはウルトラ兄弟の長、ゾフィー。
ベリアルの師とはゾフィーだった。
「そうか、ご苦労。だが呼び捨てにはするな」
ゾフィーは静かにそう言った。
特に怒ってはいないようだ。
「はいはい、ゾフィー様」
ベリアルは軽くふざけた。
「もう少し緊張感を持て、お前は態度が軽すぎる」
ベリアルの態度に、少しだけ注意した。
〜リリリリリリリリッ！〜
ゾフィーの注意の直後、本部回線の無線が鳴り響いた。

そして通話ボタンを押した。

「こちら第３支部、ゾフィー」

自分の所在支部と名を告げたゾフィー。

「こちら宇宙警備隊本部、エース」

通信相手はエースだった。

「何かあったのか？」

「ああ、第３支部の近辺で次元の歪みを感知した」

次元の歪みとは、宇宙に渦巻くエネルギーがひとつの場所に集まり。

それが空間に留まりきれない量に達したとき。

大量のエネルギーにより、次元に歪みが生じる事である。

「分かった、これから調査に向かう」

ゾフィーはエースの報告により、調査に乗り出した。

「よろしく頼む」

エースはそこで通信を終えた。

次元の歪みは場合によれば、怪獣の大量発生にも繋がる。

早々の調査は警備隊の基本である。

「ベリアル、私は次元の調査に向かう。留守番を頼んだぞ」

ゾフィーの頼みに、ベリアルは猛抗議した。

「何でオレは行けないんだよ！？2人の方が調査も早く進むだろ！」

「かと言って、支部を空っぽにはできんだろう」

そう、現在第3支部にいるのはゾフィーとベリアルの2人のみ。

2人が任務に出たら、支部はもぬけの殻だ。

「じゃあ、ゾフィーが休んでてくれよ！オレがささっと終わらせてくるから！」

ベリアルは先輩を差し置いて任務に行くと言い出した。

滅茶苦茶である。

「馬鹿を言うな。お前だと雑な調査をするだろう」

ゾフィーの言う通り、ベリアルは戦闘ではかなりの実力者だが。

こと調査や整理に関しては、全くの素人である。

「・・・チッ、ああ、分かったよ。留守番すりゃいいんだろ」

ベリアルは渋々だが留守番を引き受けた。

「ああ頼んだぞ、ベリアル」

そう言うと、ゾフィーは管制室を後にし、調査に向かった。

しかし。

「・・・けっ、オレが大人しく留守番なんてするわけねえだろ」

そう言い終わると、ベリアルはモニターを操作しだした。

「警戒レベルをAまで上げときゃ、留守番もいらねえだろ」

ベリアルはモニター操作で、第3支部の警戒レベルをAまで上げたのだ。

レベルAというと、怪獣の2、3匹くらいなら殲滅できるくらいだ。

「よし、そんじゃゾフィーを追いかけるか」

ベリアルは留守番を放り出し、ゾフィーの後を追った。

しかし。

「痛っ！」

ベリアルは出入口の電磁ネットにかかり、出られなかった。

「そういや、外の出るときはテクターギアを付けるんだったな・・・」

テクターギアとは、ゼロも着用していたギプス。
簡単に言うなら「力をセーブする鎖」
「・・・仕方ねえな、付けていくか」
ベリアルはテクターギアを着用して、ゾフィーを追った。
それがベリアルの小さな進歩の始まりだった。

・・・・・・・・・・・・・

「この辺か・・・」
ゾフィーはすでに次元の歪みの生じたポイントにたどり着いていた。
その一体は文字通り、空間が捻じ曲がっていた。
「下手に近づけば、私も歪みに引き込まれるか・・・」
ゾフィーは次元の歪みから、少し距離を置いている。
それは歪みに近づきすぎると、別次元に飛ばされる危険性があるからだ。
最悪の場合、元の次元には戻れなくなる。

「仕方がない、時間はかかるがこの辺りで調査を開始しよう」
そう言うとゾフィーは猥脇に抱えていた機械で、歪みの観測を開始した。
そして、ゾフィーの背後、約２，０００ｍ。
そこにある小惑星の影に、ベリアルは潜んでいた。
「何だよ、本当にただの調査か・・・つまんねえな」
ベリアルは勝手に抜け出しておいて、愚痴をこぼした。
「わざわざテクターギアをつけて抜け出してきたのにょぉ」
抜け出す事自体が問題だが、そんなことは気にしていない。
「もう少し近づくか・・・」
ベリアルは８００ｍほど接近した。
「これ以上は行けねえな・・・」
ゾフィーは勘が鋭い。
弟子のベリアルあｓなら、あっという間に見つけられてしまうだろう。
「様子を見るしかねえな」

ベリアルはゾフィーの観察を始めた。

そして。

「なるほど、この辺りの歪みはヤプールの封印解除が原因か」

ゾフィーは手際よく調査を進め、原因を突き止めた。

今回の次元の歪みは、Uキラーザウルスの封印解除が原因だったようだ。

「しかし、もうかなり時間が過ぎたというのに、未だにヤプール絡みか・・・」

封印が溶けたのは2年前の事だ。

そのエネルギーの残留というのは、考えにくい。

「・・・まさか、ヤプールにはまだ生き残りがいるのか・・・？」

ゾフィーは調査の結果、ヤプールの生存の可能性があると考えた。

「支部に戻るか、エースに報告して詳しく調査するべきだ」

ゾフィーは機会を片付け、支部に戻ろうとした。

だが。

ピュンッ！

「！」

どこからともなく光線が放たれた。

突然の不意打ちだったが、ゾフィーは慌てることなくかわした。

「・・・悪い予感が当たってしまったな・・・」

ゾフィーが振り向くと、目の前にはヤプールの作り出した兵器。

エースキラーが3体、立ちはだかるように出現した。

「お前は知りすぎた」

機械的な声でエースキラーの内1体が言った。

否、エースキラーが言ったのではない。

それはヤプールの怨念による声だった。

「ヤプールの怨念はUキラーザウルスだけではなかったのか」

ゾフィーは言うと同時に、構えをとった。

「死ぬがいい」

3体のエースキラーは一斉にゾフィーを狙い打った。

{どうする・・・3体を相手にしながら調査結果を守りきれるか・・・}

ゾフィーの実力は本物だ。

伊達や酔狂でＮｏ．４についているわけではない。

だが、機械を守りつつ、３体のエースキラーを相手取るのはゾフィーでも困難だ。

状況はゾフィーの不利と言わざるを得ない。

ゾフィーはエースキラーの攻撃を見事にかわし続ける。

だが、一発の光線がゾフィーの右足を掠めた。

「くっ・・・」

それでも直撃は一度もない。

「小賢しい・・・」

１体エースキラーがエネルギーを貯め始めた。

他の２体が光線を打ち続けているために、ゾフィーは反撃ができない。

「死ね」

エネルギーを貯め終えたエースキラーが巨大な光弾を打ち出した。

{っ・・・かわしきれない！}

ゾフィーはウルトラバリアを発生させたが、2体のエースキラーの攻撃で砕けた。

そして、巨大光弾はゾフィーを捉えた。

しかし。

ゾフィーに当たりかけた光弾を別の光線が相殺した。

「ピンチみたいだな、ゾフィー」

光線を放ったのはベリアルだった。

エースキラーが出現した瞬間に、猛スピードで接近してきたのだ。

「ベリアル!?お前、どうしてここに・・・」

ゾフィーは目の前にいるベリアルに聞いた。

「んなこと言ってる場合かよ、ここはオレに任せろ」

そう言ってベリアルは拳を固めた。

「待てっ!いくらお前でもギアを装着したまま3体を倒せるか!」

ゾフィーはベリアルを止めようとしたが。

「3体?ハッ、こんな雑魚、片手でも余裕だぜ」

指を鳴らしながら笑い飛ばし、姿勢を崩さない。

「そんなにオレが心配なら、早いとこ調査結果を置いて助けに来るんだな」

ベリアルは、テクターギアを軋ませながら。

「オレを信じろ」

静かにそう言った。

「・・・・・・頼んだぞ」

ゾフィーは振り向くことなく、支部に向かった。

ベリアルはそれを確認すると。

「お前ら・・・絶対に許さねえ・・・」

エースキラーに向けてそう言った。

「お前らのせいでガラにもねえ、臭いセリフを言う羽目になっただろうが」

ほぼ八つ当たりだ。

それに対し。

「貴様も死ぬがいい」

エースキラーから声が響く。

「死ぬのはお前らだ」

ベリアルもそれに応えるように挑発した。

「行くぜっ！」

そう言うと同時に、1体のエースキラーに近づく。

そして、拳を振り抜き。

その拳はエースキラーの胸辺りを貫いた。

「まず・・・1体」

ベリアルはあっという間に1体のエースキラーを破壊した。

「次、行くぜ」

2体のエースキラーはベリアルが言い終わるより早く、光線を放った。

「そうこなくちゃな！」

ベリアルは光線をかわすこともなく、真っ直ぐに向かっていった。

「こういう時はテクターギアも役に立つな！」

テクターギアは訓練用の防護服でもある。

防御力に関しては、アーヴギアには劣るがそこそこなものだ。

「ウオラァっ！」

勢いそのままに、1体のエースキラーに飛び蹴りを浴びせた。

バキッ！

そんな音と共に、エースキラーは腰部分から真っ二つに折れた。

「これで2体っ」

そう言うと、ベリアルは右腕を頭上に掲げた。

「ラストだ」

そして胸の前で両手をクロスさせ、左右に大きく開いた。

「喰らいやがれっ！」

そして、胸の前に腕を戻しつつ、開いた手をクロスした。

「ネオスペシウム光線！」

言い終わるが早く、クロスした腕から光線が放たれた。

その光線は残りのエースキラーを捉え、跡形も残さぬほどに破壊した。

その場に残ったのはほんの少し疲労したベリアルだった。

「オレとまともな闘いがしたいなら、あと２０体連れてくるんだな」

誰もいない空間で、捨て台詞を吐いた。

「さて、戻ってゾフィーに自慢してやるか・・・・」

不謹慎極まりない言動だが、強さは本物だ。

ベリアルは支部に戻ろうとしたが。

〔逃がすものか・・・・〕

ベリアルの声ではない。

ベリアル以外には誰もいないが、声は続いた。

〔貴様は消えろ・・・・・・・〕

声が消えたときに、ベリアルは気づいた。

「ちっ、囲まれてんな・・・・・・・」

ベリアルは次元の歪みに囲まれていた。

巻き込まれればベリアルだろうと別次元に飛ばされる。

「これはマジでやべえな・・・・・・・」

真の危機感を感じつつ、ベリアルは考えた。

〜これ、突っ込んだら突き抜けて向こう側にいけねえかな・・・〜

行ける訳がない。

「よし、善は急げだ。試してみるか」

そして、ベリアルは次元の歪みに突っ込んでいった。

案の定、突き抜けること無く、別次元へと飛ばされた。

そこで、ベリアルは変わり始める。

ステージEX　「ベリアルの守ったもの」（後書き）

すいません。

1話にまとめようとしたら意外に色々浮かんできて・・・

2話完結になってしまいそうです。

ですが終わったら本編も続けますので。

ご期待下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1061z/

ウルトラマンゼロ外伝　　～ブルーファイトウォーズ～

2011年12月21日21時46分発行